

説経「さんせう太夫」訓解

(上)

——妹の力・安寿のゆくえ——

大内建彦

はしがき

水上勉は文芸誌『新潮』の一九九七年一月号から「説経節を読む」という題目の新連載をはじめている。そして、その三月号までの三回分をさいて、数ある説経作品のうちからまず「山椒太夫」をとりあげ、エッセイ仕立ての論考を試みている。「山椒太夫」をいの一番にとりあげたのは、おそらく、鷗外の同一タイトルのこの歴史小説が世に、姉、安寿と、弟、厨子王丸の物語として、ストーリーともどもよく知られているということが念頭にあったからであろう。それに加えて、連載第一回の冒頭で、幼少時、この説経とも関わり深い彼の生まれ故郷、北陸若狭地方の寒村で、門付け芸としての瞽女（盲女の旅芸人）の説経語りを目のあたりで見聞したエピソードが紹介されているから、この切実な体験も、この「山

椒太夫」をまず題材にのせて論述しはじめる大きな動機となっているのであろう。そして、説経をよみときつつ、幼少時実演に会った見聞体験をたぐり寄せつつ、場面場面の情景をたちあがらせ、演じものとしての説経と、文芸作品としての鷗外の小説とを対比し、その差異をきわだたせつつ、今「説経を読む」ことの営為の何たるかを、いわばその序章において浮び上らせようとしている。水上は、固定したテクストとしての近代小説というものと、語り芸としての演じものとを隔てるものは、くり返し異なる視聴者の面前で演じられ反復される中で、台本ははみ出て、その場その場の主客の掛け合いによつて繕い合わされる情念のゆらぎの有無によるのだともいいたいのである。固有の風土性に根ざした異なる時空で、さまざまな人々が織りなす、いわば外側から内部へと向かう語りの劇（ドラマ）への個々の身体的な情念の関与が、説経というも

のに内在する宗教性を人間の内部にうごめき出させ、その力が人間に浄化と解放の感情をもたらすのであろう。説経そのもののもつ歴史的意義は更に検討されなければならない。さらには又、汚名をそそぎ立身栄達を再びわがものとする厨子王が主人公であるはずのこの物語りが、復讐される側の「山椒太夫」なる人物名を総タイトルとすることの理由とは何なのか、「さんせう」の意味ときをはじめとして、この説経には説経語りとしての難問や不可思議な要素が数々孕まれている。

ところで、名匠溝口健二は一九五九年、鷗外の『山椒太夫』を原作に、母親役に田中絹代、兄役に花柳喜章、妹役に香川京子を配して名画『山椒太夫』をとった。ヴェネチア映画祭で賞をとったこの映画は溝口らしく、安寿役の女優香川京子の美しさがひととき目立つ映画だとしてあえずはいっておこう。この映画のラストシーン、厨子王と母とが出会い、母の眼が涙とともにあく場面で抱き合う二人の背景をなす佐渡の海が、少し引かれて遠景でパンしつ、横移動しながら延々とつづく情景がとりわけ印象的だが、この場面が後年、J・L・ゴダールの『気狂いピエロ』の終末部、永遠を象徴する海をエンディングとする場面に引用されたことはよく知られている。

そのエピソードはさておき、溝口作品に孕まれたより大きな問題は、上の配役の部分で既述のように、鷗外作品とはことなつて、彼が安寿を妹に、厨子王を兄に、いわば兄と妹の物語へと読みかえつつ創作している点にある。小説と映画という表現の媒体のちがひによるといつてしまえばそれまでだが、ここには、近代映画の映像上の文法による置換現象があり、それ以上に近代的な家族像を反映させた読みかえというようなことも指摘しうるだろう。

そういった問題点も視野に入れつつ、この「山椒太夫」伝説の伝承過程の孕みもつ、記述された台本と演じられたもの、台本と語り直された文芸作品としての小説、その間の対比、並行関係についていろいろ考えてみたいと思つた。そういった伝承や享受の歴史的過程にあらわれてこざるをえない主人公像の微妙な変容の跡を、「妹の力」の構造的変容などともからめ合わせつつ、位置づけてみたいと思つた。この訓解の試みは、そうした関心対象の解明のための下作業として企図されている。

説経「さんせう太夫」は、語り物芸能の台本として翻刻されたものであるために、当然のごとく、話し言葉や日常語の頻用を伴い、文脈上からいっても、語り上の省略あるいは、話し手、語り手主体の中途変更などをはじめ

めとして、本文の異同も多く、芸能台本としての孕みもつ難解さがいたるところに露出している。

ともあれ、そうした諸点によく留意しつつ、できうるかぎり忠実に且つ、説経としてのそれなりのリズムがよりよく生きるように口語訳をころもみた。説経台本中には、コトバ、フシの語を交互に重ねさせるのを基本形としつつその他、クドキ、ツメなどと、説経独自の節、語り回しなどの技法をさすらしい注記があちこちに見られるが、演じものという性格から考えて、とりあえず中心をなすと思える独特な語りの節回しⅡフシの場面を主軸にすえて解釈してみた。

この「さんせう太夫」はかなり長く、説経台本としては最も古いとされる江戸初期の与七郎正本では、上中下三巻に分かたれている。この稿の底本は室木弥太郎編・校注の新潮古典集成本『説経集』によったが、その本文に従いつつ上述の与七郎正本にいう上巻にあたる部分を訓解の対象としたものである。

正氏の流罪と家族の不遇

コトバ これから語り申す御物語、国を申せば丹後の国、金焼地蔵の御本地を、ざつと説き明かしお披露め申すと、この地蔵もかつてひと度は人間にて居らっしゃる。人間としての御本地を尋ね申すと、国を申せば奥州日の本の將軍、磐城の判官正氏殿のこととて、いろいろ哀れなことがあつたよ。この正氏殿と申す人は、性が強情なということで、筑紫の安樂寺へと流されなかつて、憂き目にあつていらっしゃる。

フシ あゝお勞しい御台所(奥方)は、姫君若君ともども、伊達郡の信夫莊へ流浪の身となられ、お嘆きのほどもごもつともであつたよ。ほんのある日の出来事に、いずこともなく、番いの燕が舞い降りて、お庭の塵を啄んで、長押の上に巢をつくり、十二の卵を暖めて、雌雄かたみに育てていらっしゃる。⁽¹⁾それを厨子王丸はご覧になつて、「ねえ、母上様、あの鳥は何という鳥？」とお聞きになる。母上それをお聞きになつて、「あれは常磐^{とわ}の国から年毎に、必ずやつて来る鳥で、燕とも 申します。又別に耆婆^{ぎば}鳥とも申します。とても優しい鳥ですよ」。

厨子王丸、上京を決意

コトバ 厨子王丸はそれを聞き、「何と不思議な今日の日よ、あのように天翔ける燕さえ、父と母と、二親持つというのに、姉上や私は、父といわれる人がいらつしやらない、不思議なことよ」とおっしゃれば、母上そのことをお聞きになつて、「そなたの父の磐城殿は、ひと年、御所の大番役を調達なさらなかつたおとがめで、筑紫の安樂寺へと流されて、憂き目にあつていらつしやる」。厨子王丸は(それを)お聞きになつて、「父上はこの世にいらつしやらないかと思つていましたのに、父上がこの世にいらつしやるとなれば、姉上や私

注(1) 「つかまつる」と擬人化した表現をとっている。

に、どうぞ機会を与えて下さい。都へ上り、朝廷で安堵（所有権公認）の御綸旨（勅旨の文書）をいただいて、奥州五十四郡の長となろうよ、母上様」。母上そのことをお聞きになつて、「それほど切に発意するのなら、私も一緒に上りましょう」と、御乳母のうわたき一人をお供に、秘かに旅の用意をなさつたよ。故国を三月十七日に、ほんの軽い気持で出で立たれ、のちのち身にしみて後悔なさることと相なつた。三十日ほどの道中を経て、越後の国直江の浦にお着きになつた。日も東より出て、この国を照らし、いつしか暮れそめたので、（御台所が）「宿を取つて下さい」（という）。うわたき（それを）承つて、直江千軒を一軒一軒「一夜の宿を」と借り歩いて、九百九十九軒ばかり頼んではみても、貸してくれる者など一人もない。

フシ あゝおいたわしい四人の人達は、とある所に腰かけて、「あゝ何という情のない人達ばかりの世間なのかこの里は。一夜の宿さえ貸してはくれぬことの悲しさよ」。

コトバ （そう）嘆いていらつしやるところに、海路よりもどる（一人の）女房このことを聞きつけ、「旅途中の奥方様の仰せはもつともだ。ここは直江の浦といつて、悪人が一人二人いるばかりに、越後の直江の浦では、人売りがあるよとのもつぱらの噂。このことを地頭はお聞きになつて、（そうした氏素姓の知れぬ者に）理由はどうあれ宿貸す者があれば、向う三軒両となり、処罰するところのお達しがあるので、貸す者などは決してあるまい。あすこに見える黒い森のもとに、逢岐の橋といつて、広い橋があるよ。そこへいらして、一夜あかしておいでなされ」と申された。

フシ 御台所このことをお聞きになつて、これは氏神さまがかしくも教え下さつたかと、

四人つれそつて、逢岐の橋に着いたけれども、昔から今日まで、親子の仲に、いろいろ哀れなことがあつたよ。北風の吹く方は、誰もが（寒く）難儀であらうと思ひになつて、うわたきに風を防ぐ工夫をおさせなさる。南から吹く風を、これは御台所がお防ぎなさり（荷から）小袖を取り出して、お席の敷物になされて、二人の間に姉と弟の君が横になれる。

コトバ 以上は直江の浦の御物語。ここに山岡太夫と申して（この人は）人を売りつける名人だ。いや何ともはや、昼間の奥様方に、お宿を勧めそこなつて、腹だたいことよ。だまし売つて、自分の思いどおりにいい商い（^②）をしようと思つたに、女人どもの足のことだから、よもや（まだ）遠くへ行つてはいまい。浜路の方へ行くべきか、はたまた逢岐の橋へ行くべきかと、草鞋、脚絆の緒を締めて、鹿杖（^{かしづえ}）ついて、逢岐の橋へと急がれる。逢岐の橋に着いたらば、四人づれの人達は、旅疲れでくたびれはてて、前後も知らずぐつすりとお眠つておいででいられます。ひと脅かししてやろうと思つて、（手に）もつた鹿杖で、橋の上を、ドンドンと突き鳴らして、「ここにお寝（^{やす}）すみの旅人は、（この橋がどういう橋か）ご存知の上でのお休みか、あるいはそうではないか。この橋と申せば、供養をしなかつた橋だものだから、山からは大蛇が下りて来て、池から大蛇（^{おろち}）が上り来て、夜な夜な会つて、契りをなし、はてさて明方になつたらば、会つて別れるということ、それゆゑにこそ名づけて逢岐の橋と申すのよ。夕方をすぎると人を引き囚らえて、（その人は）行方が分らなくなる」と人の噂だ。あゝおいたわしいことよ」と言い捨てて、なにげないふりして戻られる。

注（2）「春過ぎをせうと思ひ」とあるが意味不詳。

フシ 御台所はこのことをお聞きになり、突如身をつかちと起こされて、月夜の光のただ中で、太夫の姿をご覧なされて、五十才余の太夫殿、慈悲深そうな太夫殿に、宿を借りそなたは大変と、太夫の袂にすがりつき、「ねえもしもし、太夫殿、私だけのことならば、虎や狼、化け物どもに、連れ去られようとも仕方ありません。ほらほらこれを御覧下さいまし。ここに眠っている子供こそ、奥州五十四郡の主長となるはずの者ですが、さてそれが思いがけない訴訟のために、都へ上り、宮中で安堵の勅旨をいただいて、もとの領地に帰るつもりですが、されば、どうして太夫殿に、むやみにお布施の金品を惜しがりましようぞ。⁽³⁾どうか一夜の宿を」とお願いなさる。

コトバ 太夫はこのことを聞く前から、たとえ宿を借りたいと申さずとも、(太夫の方から無理にも宿が貸したい(と思っていた)ので、(御台所が)宿を貸してほしいと申されるので、うれしいことこの上ない。しかしながら、(うまく)偽りを言つて騙さなければと思ひ、「のう、もし奥方様、お宿をお貸ししとうはあるが、ご存知のように、お上の取り締りが厳しいので、(お宿をと)思ひながらも、お宿をばお貸しすることはできませんまい」とおっしゃられる。

フシ 御台所このことをお聞きになつて、「ねえ、もしもし太夫殿。これは譬えではありませんが、費長房や丁令威⁽⁴⁾(やらの中国の故事で)は、鶴の翼を宿となす。達磨大師は芦の注⁽³⁾ 東洋文庫本は「所知に所領が」とも読みとれるとし、「所領さえも惜しくはない」の意とも解しうるとする。

(4) 中国の古典籍にみえる故事。ただし「費長房」のほうは鶴との関係は不明。

太夫、一行に宿を貸す

葉を宿となす。旅は心、世は情け⁽⁵⁾。また、大船は浦全体の協力があつてこそ、捨て子は村全体の育みによつて生きるもの。木があればこそ鳥も棲み、港があればこそ船も寄る。さつとひとしきり降る時雨や村雨時の他人と一緒の雨宿り、これも多生の縁と人は言います。是非とも一夜の宿を」とお願いなさる。

コトバ 太夫このことをとくと聞いて、「お宿はお貸ししまいと思うけれど、余りにおつしやる事情が親身に思われるので、それではお宿をお貸し申しましよう。道すがら人に会つたりしても、太夫にだけ話させて、人目をさけて下さい」といつて、太夫の家へとお供される。奥方様の運も（いよいよ）尽きて、道中人に会うこともなく、太夫の宿にお着きになる。太夫は女房を呼びつけて、「なあお前、昼の奥方様にお宿をお貸しするぞ。夕飯を用意しておもてなせよ」と。女房は（これを）聞いて、「あなた様は若い時のことを未だ忘れていらつしやらない、（今また）お宿を貸すとおつしやるのか。あの奥方に、お宿を貸そうとおつしやるなら、私めには不本意ながら（どうぞ）離縁のいとまを」と所望なさる。太夫はたと睨んで、「さて（どうして）そなたは、なまじつか道心めかしたことを申すものか。今年は親の十三回忌にも当つて、慈悲でお宿を貸そうというのに、それも惜しいというのか、女房」。古女房はこのことを聞いて、「つい今までは、人に売らんがためと思つて、そのように申しておりましたが、慈悲でお宿をお貸しなさるのなら、（どうぞ）こちらへ」と申し、足をすすぐ湯をつかわせて、家の座敷へとお通しし、もてなして、（その）女房は夜中頃やつてきては「ねえ、もし奥方様。お話しに参りましたよ。さて昼

注（5） 旅には思いやりが、世渡りには情けが何より大事の意。

に、私めがお宿をお貸しできないと申したのは、あの太夫というのは、七才の時からもう、人買い船の櫓を相方と一緒に押した、人売りの名人です。もし奥方様をお売りし、何と薄情な太夫かなと、恨めしい古女房かなと、いわれることが残念で、それでお宿はお貸しできないと申したのです。（しかし太夫が）慈悲のお宿をということなら、五日でも十日でもどうぞ足を休めて行つて下さい。それでも油断はなさいますな。太夫が（あなた方を）売ると解つたならば、わたしが知らせてあげましょう。（それを）太夫は立ち聞きたいし、古女房がどのように言おうとも、騙し売つて、自分の思いどおりに商いをしようと思うので、寝られはしない。座敷にやつてきて、「もしもし奥方様に申し上げます。この家の太夫でござるが、お話をしに参りました。（あなたさまは）以前にも京にお上りになられましたか」と（太夫が）問うたらば、御台所命運もいよいよ尽きはてて、「この度が初めて」とおっしゃられる。太夫このことを聞くが早いか、今度が初めてのことならば、船路で売ろうと、陸で売ろうと、うまくいったも同然と思い、「もしもし奥方様、船路をいらつしやるか、陸路を行かれるか」と（太夫が）問うたので、御台所はこのことをお聞きになつて、「船路であつても（どうであつても）、道に難所のない方を教えて下さい」とおっしゃつた。太夫このことを聞くが早いかすぐさま、「（それでは）こればかりは船路をいらつしやいまし。この太夫がよき小船を一艘持つているので、（それで）沖までこぎ出て、都合よい船便を頼んで差しあげよう。とこう申しているうちに、もう夜があけそうですよ。夜がすっかり明けてしまうと、家中が大騒ぎになるから、早く早くこつそりと人目をさけて出かけましょう。奥方様」と騙し込む。

フシ あらおいたわしい四人の人達は、売り買いされとも知らないで、太夫の家を忍び出て、人の家の軒端伝いに、浜辺を指して下つてゆく。さてきて浜路に着いたらば、(太夫は)太夫の夜船に取り乗せて、鱸^ど綱解く間もおしまれて、腰の刀をするりと抜き、とも綱ずつと切つて、品不足の折からいい商いだと、心の中でこつそり快哉を叫び、「えいやつ」と声かけて、櫓拍子踏んで進めるうちに、夜の闇間に三里ばかり沖に出る。

コトバ 沖をじつとよく見ると、霞の中に舟が二艘みえる。(太夫)「そっちの舟は、商い船か漁船か」と問いかける。一艘は「江戸の二郎の舟」、もう一艘は「宮崎の三郎の舟」と答える。(二郎三郎)「そなたの舟は誰が舟か」。(太夫)「これは山岡太夫の舟」。(二郎三郎)「おお何と珍しい太夫殿よ。商い物はあるか」と問うたらば、「もちろんあるよ」と片手を上げ、親指一つ折っているのは、四人あるとの合図のしるし。(二郎)「四人いるのなら五貫で買おう」と、はや値をつける。宮崎の三郎これを見て、「そなたが五貫で買おうというのなら、それがしは先約束があるくらいだから、一貫奮発して六貫で買おう」。(6)俺が買う、もう一方が買おうと口論する。けんかにまでなろうとしたので、太夫は舟に飛びうつり、「手を打つな、鳥⁷が立つてしまふに。殊にこの鳥は若鳥だから、ゆく末繁盛するよう⁸に、双方に売り分けて取らせよう。先ず、江戸の二郎の方は、奥方のほう二人買うてゆけ。また宮崎の三郎の方は、姉弟^{きょうだい}二人買うてゆけ。負けて五貫で取らせよう」と(いい)、

注(6) 意味不詳部分。「声高な口論で悪巧みがばれてしまうことをおそれて」というくらい在意か。

(7) 意味不明。「大きな声をたてるな」の比喩表現か？

又自分の舟に飛び移って、「のう、もし旅の奥方様。ただ今の口論は、誰ゆえのこととお
思いか。奥方様らのことゆえでございますぞ。二艘の舟の船頭どもは、太夫にとっては甥
どもです。小父の舟に乗っている旅人を、俺が送ろう、もう一方が送ろうと口論する。あ
の二人の氣にいるのはたやすいこと。（行く先の）村里も一緒、湊も一つのことだから、舟
足を軽くなさって、分かれて二艘でお航行（うき）なされ。まず奥方様たちお二人は、あつちの舟
にお乗りなさい。お子たち姉弟は、こつちの舟にお乗りなさい」と、太夫は（四人を）料
金五貫で売り払い、直江の浦へと戻られる。

フシ 殊に哀れをとどめたのは、二艘の舟にて（行くことになった）にとどめをさす。五
町（五〇〇メートル強）ばかりは一緒に航行するが、十町ばかりも行き過ぎると、（次第
に）船は北と南へ別かれゆく。御台所はこれをご覧になって、「あれまああの舟とこの舟
の、間合の遠いとおかしいよ。同じ湊へ着かないよ。舟漕ぎ戻して、ゆつくりと進めて下
さい船頭殿」。

コトバ （二郎）「何と申すか。今朝は福神エビスを祝い損い、思いどおり買えなかつたこ
とさえ腹が立つのに。お前さん達二人は買ったのだ。（おとなしく）船に座っておれ」と
いうばかり。

フシ 母君このことをお聞きになつて、「あゝあゝ、ねえうわたきよ。あれまあ売られたよ。
買われたとよ。あゝ薄情な太夫よな。恨めしい船頭殿よ。仮に売り買いするにしても、一
緒に売ってはくれないで、親子の仲を、ふた方に売り分けたよな、あんまりだ」。宮崎の
三郎の方を打ち見やつて、「あゝあゝ、ねえ子たち姉弟よ。あれまあ売られたとよ、買わ

れたとよ。どうぞ命を大切に子たち姉弟よ。再び（解放されて）世に出ることもありましよう。姉の肌身にかけたのは、地藏菩薩であります、もし姉弟の身の上に、万一大事がふりかかれば、身代りになって下さる、地藏菩薩さまですよ、どうぞ厚く信じて掛けなさいね。又弟の肌身にかけたのは、奥州二郡、志太、玉造の系図の巻物。死んで冥途へゆく折にも、閻魔王に差し出すみやげにもなると言いますよ。決して落すでないよ、厨子王丸」と、声の届くうちにと、なにやかやと物ごとを言い置きなさる。次第に帆影も遠くなる。もはや声の届かぬ所となつては、腰の扇を取り出して、ひらりひらりと手招きなされても、舟は近よるところか（遠のくばかり）。今朝、越後の国直江の浦に立つ白波が、妨げとなる雲のように隔てとなつて、（御台）「わが子が見えぬよ、悲しやな。善知鳥うすかた安方の鳥でさえ、母鳥が子鳥のことを思い嘆く習いもあります。ねえ、もし船頭殿。舟漕ぎ戻して、どうぞ今生の別れの対面を、今一度させて下さいよ」。

コトバ 船頭は（このことを）聞くがはいか、「何と申すか。一度出したる舟を、逆に戻すなどという法などない。じつと船底に座っておれ」というばかり。うわたきの女房、「わかりました」と言い、「賢臣は二君に仕えず、貞女は二夫に見えず（と申します）。

（身分を違えることとなつて）二心を抱くことなど致しますまい」と、船梁につと立ちあがり、数珠を取り出し、西に向つて手を合わせ、声高に念仏を十遍ばかりお唱えなさつて、直江の沖へと身を投げて、水底みなそこの藻屑とおなりになる。

フシ 御台はこれをご覧になつて、「あゝ親とも子とも姉妹とも、あれほど頼りにしてきた

注（８）「しゅへん」の数珠とあるが意味未詳。

うわたきは、（入水して）自ら身を果ててしまいました。あゝ（一人残された）私はどうなるのでしょうか」と、涙を流し胸を焦がしてお泣きなさる。零れる涙をじつとこらえ、ちぎり紋様で濃淡紺むらこんの小袖を取り出して、「ねえ、もし船頭殿。これは少いのですが、これは今朝のお代です。さあ私にも、暇を下さいましよ。身を投げますよ、船頭殿」。

コトバ 船頭このことばを聞くが早いか、「何と申すか、一人損をしたのに、二人まで損してなるものか」といつて、手に持つ櫂で打ち伏せ、船梁に結わえつけて、蝦夷えぞが島へ売りさばく。蝦夷が島の商人は、働く能がない技能がないとみて、手足の筋を断ち切つて、（御台は）日に穀一合を与えられ、粟食う鳥を追うていられます。以上は御台の御物語。それはさておき、殊に哀れをとどめたのは、あゝ宮崎の三郎が、姉弟二人を二貫五百に買い取つて、あつちこつちに（声をかけて）売るうちに、ここに丹後の国由良の湊の山椒太夫が、値ぶみして十三貫で買ったことは、ただただこのことが諸事の哀れ（のはじまり）と知れわたっている。太夫はこのことをお聞きになつて、「さて何とよい下人を、買い取つたはうれしい限り。孫子曾孫の末代までも、譜代下人として呼び使えることのうれしきことよ」と、喜ぶこと限らない。ある日のこと、姉弟を御前に召され、（山椒太夫は）「こちらの家内では、名のない者は使わぬが、お前の名をば何と申す」とお尋ねなさる。姉君このことをお聞きして、「はい、私ども姉弟は、ここよりもずっと奥つ方、山中の者でございますので、姉は姉、弟は弟と申して、まだきまつた名もございません、他にないよき名を付けてお使い下さい」と。太夫はこのことをお聞きになつて、「もつともなことを申す者かな。そういうことであるならば、郷里は一体どこだ、国の名をつけて呼ぼう」

との仰せである。姉君はこのことをお聞きになつて、「はい、私も姉弟は、伊達の郡信夫の莊の者でございますが、故国を三月十七日に、ほんの軽い気持で出立し、越後の国直江の浦から売られはじめて、私も余りのつらさに、落ちついて数えてみれば、この太夫殿の所につくまでに七十五手に売られたが、（人々は）あちでは代金よ、こちでは商品よと申したりで、未だにきまつた名もございません。ただよき名をつけて、どうぞお使い下さい太夫殿」。太夫このことをお聞きになつて、「そうした事情であるのなら、伊達の郡信夫の莊にちなんで、お前の名をばしのぶと付けよう。忍といえは忘れ草。いろんなことを思い忘れて、太夫によく奉公いたすように、弟の名をば忘れ草と付けよう。まず姉のしのぶは、明日から、浜路を下りて、潮水を汲んでくるように。弟の忘れ草は、一日に三荷の柴を刈つて参り、太夫を満足するように養えよ」と申される。朝のあける頃、鎌と杓あみご（天秤棒）、桶と柄杓を与えられる。

フシ あゝいたわしや姉弟は、鎌と杓、桶と柄杓を受け取つて、（それぞれ）山と浜にいらつしやるが、あゝいたわしや姉君は、とある所で佇んで、桶と柄杓をうち捨てて、山の方を眺めては、「何とこの私は、この目の前に見えている、一杯ある海水さえ汲めないのに、（弟は）鎌を使ったこともない。手元が狂つて手を切つたり（してはいないかしら）、峰の嵐が激しくて、さぞかし寒かろうかわいそうなこと」と、姉は憂い悲しんでいらつしやる。又弟の厨子王殿も、とある岩鼻に腰をかけ、浜の方を眺めやつて、「何とこの俺様は、この辺りに一杯ある柴さえよう刈ることができないのに、あの波立つ白波にも、女波男波が波打つということだ。男波の潮を打たせては女波の潮を汲むとかいうことだ。女波

男波も知らないで、桶と柄杓を波にとられて（困りはてたりしてはいないか）、浜の嵐が激しくて、さぞかし寒かろう、かわいそうに」と、初日は（二人かたみに）山と浜にて泣きくらす。

コトバ そうしている所に、里の木樵りたち、山より柴を刈つて戻る途次、（厨子王を見て）「この子供は、山椒太夫の邸内の、新参の児童であるが、山へ行き、柴を刈らずに戻ったれば、無慈悲な太夫、三郎が、責め殺すまでに痛めつけるは必定だ。（困っている）人を助けることは、菩薩となるための大事な修行ということだ。さあいざ（作善のため）柴勧進をしてとらせよう」と、柴を少しずつ刈つて、ようやく三荷ばかりに刈り寄せて、「さあ、荷造り持て」という。厨子王殿はこれを聞いて、「はい、私めは柴など刈ったことがございませんので、持ったこともございません」。木樵りたちはこれを聞き、「もつともなことを申すこと」と、各々の重き荷の端にしばりつけ、あすみが小浜まで（分けもつて）助け出す。昔からいう、「重荷に小付け」とは、その時代より申すという。あゝいたわしや厨子王殿は、三荷の柴を運ばれる。三郎がこれを見て、童を片手に、柴を片手に引っさげて、太夫の邸宅に参つて、「のう、もし太夫殿に申します。この童の刈った柴をよくご覧下さい」。太夫このことをご覧じて、「何ともはやお前は柴をよう刈れないと申したが、柴をうまく刈れない者ならば、本口がそろわなくて、本末一緒くたに重ねるだろうに。全く土地の人がやるように、きれいに刈ったよな。これほど柴刈りの上手なら、三荷など朝めし前。三荷の柴に七荷増し、十荷刈れ。十荷刈らぬと相なれば、お前さんの命はないと思え」と責めたてる。

フシ あゝいたわしや厨子王殿は、門の外に出で立ちて、姉上様をお待ちになる。あゝいたわしや姉上様。裾は潮風、袖は涙にそば濡れて、桶を頭に載せて戻られる。(姉君の)衣の袂にすがりつき、「ねえねえ、何と姉上様。何とまあ私は、今日の柴を刈ることができなくて、里の木樵りたちが、情けで刈ってくれたものを、立派すぎるのがいけないと言つて、三荷の柴に七荷増し、十荷刈れよと姉上様。どうぞ三荷のままにわびて下さい」。姉君このことをお聞きになつて、「そんなに嘆きなさるな厨子王丸。何とまあ私も、今日の潮水を汲めなくて、桶と柄杓を波に取られて、海人の情けで汲んでもらつて、今日の役目は何とか務めたが、明日はどうなることやら解らぬよ厨子王丸。聞くところによると太夫殿、五人いられる子息の二番目の、二郎殿と申す人は、慈悲第一のお人と聞いている。きつと三荷に詫びて許してもらいましょう。そんなに嘆きなさるな厨子王丸。(私も) つられて心が乱れるものを」と、姉弟二人連れだつて戻られる。

コトバ 姉上は、柴を三荷に詫びて(許しを得、弟を仕事に)お出しになる。無慈悲な三郎がこれを聞き、「のう、もし太夫殿。きのうの柴を、童が刈ったかと、思つて申したことでございますが、里の木樵りどもが、つい気まぐれに(手助けして)刈った柴と聞きました。由良の家々千軒に触れ申そう」と言うことで、

ツメ⁽⁹⁾ 無慈悲なる三郎が、由良の家々千軒に触れ回る様こそ恐ろしや。「山椒太夫の邸内では、新参の姫と童を使つておる。山で柴を刈つてやつた者も、又浜で潮水を汲んでやるかしたならば、隣七軒両向いといえども、罪に問われるぞ」と触れ回つた三郎を、鬼かと言

注(9) 「詰」だが、具体的にはどういう場面でのどういう節まわしであつたかは未詳。

わぬ者はない。

コトバ あゝ、いたわしや厨子王殿は、三郎が（里全体に）触れ回ったもご存知なくて、又昨日の所へやってこられて、（木樵りたちに）何とか柴の勧進をしてもらおうと思われて、立ちどまって佇んでいらつしやる。木樵りたちはこれを見て、「おまえ様に柴を惜しむ者などいないけれど、無慈悲な太夫殿から、お触れが回っているから、（かわいそうには）思いなながらも、柴を刈り与える者は誰もおるまい。こう持つて、こう刈るものよ」と、鎌の使い方を教えて皆通る。

フシ あゝいたわしや厨子王殿は、氣を強くもたなくてとはと、腰にさす鎌を取り直し、何の木かもわからずに、木一本を切ったものの扱うやり方も知らないで、根本をもつて引いたとて、茨や葎が生いかり、⁽¹⁰⁾柴木を逆に引つ張ろうとしているようで、にっちもさっちもいかない。「今の境遇に甘んじるといつても、⁽¹¹⁾柴こしらえさえもままならない」と、嘆くのももつともである。「人の寿命というものも、八十、九十、百才まで続くとは思うけれど、年端のゆかぬ俺様は、十三年を一生と思えば氣も楽だ」と、守刀の紐をとぎ、自害しようと思いたつ。「早まるなちよつと待て。ここで自害をするならば、浜路におられる姉上様が、さぞかし名残を惜しむだろう」と、それでは浜路へと参つて、姉上様に暇ごいしようと思われて、守刀をまた取め、鎌と杓を肩に担ぎ、浜路をさして下られる。あゝいたわしや姉上様。着物の裾は潮風に、袖は涙にそば濡れて、潮水汲んでいらつしやる。

注(10) このあたり意味不明。前後から推しはかった上の意訳。

(11) この部分も意味未詳。

（厨子王は）着物の袂にすがりつき、「ねえねえ、もしもし姉上様。そのまま私は自害しようと思ったが、あなた様を名残惜しく思われて、ここまでやってきたのです。暇ごいをいたしましょうよ。自害しましょうよ、姉上様」、姉君このことをお聞きになつて、「何ともはやあなたは私の弟だけれど、男子おとことして自害しようと申すのですか。さては私も身を投げようと思つていたので、待ったかいがあつて、うれしい限り。そういうつもりであるならば、じゃさあ行きましょう。身を投げよう」とおつしやつて、袂に小石を拾い入れ、浦の岩端はに上られて、「あゝあゝ、何と厨子王丸。さてもあなたは私のことを、越後の国直江の浦で別れ申した、母上を拜むと思つて、私をじつと見て心ゆくまで拜みなさい。又あなたの顔を私は、筑紫の安楽寺に流されておられる、父上磐城殿を拜むと思つて、あなたの顔を拜みましょう」と、すぐにも身を投げようとなさる寸手のところで、同じ邸内に使われる身の伊勢の小萩がこれを見て、「ねえねえ、もしもし姉弟よ、命を捨てようとお見うけするが、命を大切になさい姉弟よ。命があればこそ、いつか幸運にもめぐりあえるというもの。再び世に出ることもありましょう。命を惜しむ気持ちをおもちなら、あなたがたの親や先祖のことをこそ、どうぞ語つて聞かせて下さい。さてこの私も、あの太夫殿に代々仕える、譜代下人でもございませぬ。国を申せば大和の国、宇陀の者であります、継母との仲をひどく中傷され、伊勢の国二見が浦で売られはじめてから、私は余りのつらさに、衝いている杖にきざみ目をつけて、その目を数えてみましたら、この太夫のところに来るまでに、四十二手に売られて来たが、（ここでは）今年で三年の奉公になる。初めから慣れやませぬ。繰り返しやつと慣れるというものです。柴を刈ることができぬものな

ら、わたしが柴を刈ってさしあげましょう。潮水を汲んでさしあげましょう。どうぞ命を大切に」とおっしゃる。姉君このことをお聞きになって、「わかつております。でも、その術がないために、命を捨てようと言っているのです。その術さえあれば、どうして命を捨てることを望んだりいたしましょう」。(小萩)「そういうことであるならば、今日からこの太夫の邸内に姉ができたと思いなさい」。(姉弟)「どうぞ、妹、弟ができたと思って下さい」と、浜路の途次で、兄弟姉妹の契りをなさり、姉弟そろって連れだつて、太夫の邸に戻られる。

(上巻おわり)